

和歌山の先人たち

第23回

つちはし 土橋 房之助 ふさのすけ

布に絵を捺し地場産業へ

捺染なうせんというのは、型紙や模様を彫りぬいた木板や金属板を布の上にあてて、糊のりをま

ぜた染料をなすって、模様を染めだす技術である。明治以降、紀州を代表する産業として発展してきた綿ネル製造には、欠くことのできないものであった。現在は、彫刻したローラーを機械に仕組んだものを使っているが、この日本式ローラー捺染法を考へだし、捺染業の基礎を築いたのが、土橋房之助である。房之助は、慶応三年（一八六七年）、日高郡楠井村（御坊市）に生まれた。

和歌山では江戸時代から、紋羽織もんはおりが盛んに生産されていたが、明治のはじめごろから、この技術に工夫をこらして、紀州ネルとよばれる綿ネルができるようになった。この布は肌着として製品化された。陸軍や海軍へ納められるようになってから、生産に追われるほど盛んになり、織機数は県内で五千台を超えるほどになった。しかし、他府県との競争も激しくなり、また染色不

良で品質が悪くなつて、紀州ネルの評判がしだいに落ちてきた。

そこで、明治十八年（一八八五年）、和歌山の綿ネル業者たちが、事業の将来の発展のため、和歌山市内に「色染講習所」を開設した。そして、前年まで名古屋高等工業学校の校長をしていた大日本織物協合理事の柴田才一郎しばたさいいちろうを、講師として迎えたのであった。

房之助は、数え年十九歳で、色染講習所の第一期講習生として入所し、後に紀州ネル界に名をあげた高橋亀太郎、由良福松、宮尾光之助らとともに、柴田講師について熱心に色染法を学んだ。房之助はその後、上京し、東京の八王子の色染講習所で染色織布の講習をうけ、約三年間みっちり研究を続けた。

明治二十四年（一八九一年）、大きな希望と抱負をもって、二十五歳で和歌山へ帰ってきた房之助は、さっそく和歌山市八番丁に捺染工場をつくり、友禅模様を染める

紙型を考えた。これは、原紙にいろいろな模様を彫りぬいた渋びきの型紙で、これを無地の布の上に置き、染料を捺して柄をだす新しい方法であった。当時の綿ネル関係の人々は、舌を巻いて房之助の考案を絶賛した。

それから二年たった明治二十六年（一八九三年）、イタリアから二十反のネルが輸入された。その色染法のすばらしさは格別であった。研究熱心と八王子で習得した技術をもつ房之助は、これに刺激され、何とかしてイタリアネルに対抗できる捺染を發明してやろうと、けんめいになった。

さいわいに、和歌山市で染物業をしていた山本定吉という人に資金を出してもらい、経糸けいと三十番手、緯糸おきには八番手を用いて織りあげた布に、型紙で捺染してみた。今までの紀州ネルは、経糸二十番手、緯糸六番手ぐらいだったが、今度で上がった生地は、それよりはるかに細番手の糸を使った薄物であったので、イタリアネルに負けないような優秀なものになった。

次に、木製のローラー面に縞柄しまがらを彫って、手でローラーを回しながら布の面に捺染する方法を考え出した。凸型捺染機といわれるものである。この新しい機械を工場に備えて、すぐれた製品を送りだした。

彼が考え出したこの方法は、生産効率をあげ、原価を下げることもでき、しかも品質が良いという三つの利点があり、業界は、



にわかには活気づき、発展した。しかも、房之助は自分の発明を秘密にすることなく、親切に他人にも教えたので、紀州の捺染業は、短期間に大きく飛躍したのである。

明治三十年（一八九七年）ごろから、スチームエンジンがとり入れられだすと、房之助の考えたローラー捺染は、ますます威力を発揮して、和歌山には次々と近代的工作場が建ちならび、染色学校も開かれるようになった。

明治三十二年（一八九九年）、綿ネル業界の有力者五人が発起人となり、欧米先進国の業界の実情を調査研究することになった。選ばれた房之助は、当時神戸に来ていたドイツ人、ベッカ商会のブンゲに相談し、

その商会の秋山林吉技師に同行してもらおうことにした。

房之助と秋山の二人は、アメリカを経てイギリスに渡り、さらにドイツ領アルザス・ローレン州を視察、再びイギリスのマンチェスターに引き返した。マンチェスターは、このころ世界繊維工業の中心地であった。

房之助は、ヨーロッパ

パのローラー捺染機の進んでいる現状を知った。ここで六色捺染機械のほか、数種の紡績関係の機械を買う約束をした。そのころ、まだ日露戦争前であり、イギリスでは日本は遅れた国だと思われていて、そのため交渉はなかなかまとまらなかったが、ベッカ商会の援助もあって、何とか商談の成立にこぎつけた。

房之助は、さっそく、このことを日本に伝えた。和歌山の五人の有力者は、機械買入れの通知を見て驚いた。

彼らは、房之助たちの渡航費を合わせても、五万円と見積もっていた。ところが、機械だけで十万円だというのだから、五人の意見はいつこうにまとまらず、数十日が過ぎてしまった。

房之助たちは、イギリスのホテルに泊まって返事のくるのを今日か明日かと待ったが、返事はなかなかこなかった。待つ者にとっては、ずいぶん苦しい日々であった。

和歌山では苦心の末、田辺の知人に頼んで資金を出してもらうことに決まり、やっと房之助たちの努力が報われた。

このようにして、イギリスで買った機械が、和歌山の工場にすえつけられ、いよいよ運転が開始された。お金のことを考えないで、高い機械を勝った房之助を非難した人たちも、その機械のすばらしさに驚き、今度は房之助の度胸と機械に対する確かな眼に、賛辞をおくるようになった。

このころ、神戸の外国商館の社員が、凹型ローラーの写真を持って和歌山へ来た。凹型ローラーは、今までの凸型ローラーより染料が少量ですむばかりでなく、非常に細かい線をきれいに捺染でき、経済的にも技術的にも、凸型と比べものにならないほど優れていることを説明した。そこで、和歌山の工場でもこの凹型の機械を導入するものがでてきた。

房之助が高い金を出して購入した凸型捺染機は、すでに時代おくれのものとなった。それほどまでに、捺染技術の発達は目ざましいものがあつた。

房之助は、のちに京都に行き、高野川のほとりに工場をつくって、小幅捺染に全力をつくすことになった。

やがて、会社をやめた弟の寅吉も来て、協同で仕事をすすめた。明治四十三年（一九一〇年）、和歌山にもどり、屋形町の工場を買収して、虎伏染工場として捺染業をおすすめしていった。

明治四十五年（一九一二年）、房之助は高橋亀太郎、渡辺綱五郎たちとともに、綿ネル業者に対抗しうる捺染業者の組合をつくった。ここに、房之助は名実ともに紀州の捺染王とよばれるようになったが、惜しいことに大正八年（一九一九年）、まだ五十二歳の若さで亡くなった。

*和歌山県発行の『和歌山の先人たち』より
抜粋